【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和６年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

学校名	多久市立東原庠舎西渓校
1 前年度 評価結果の概要	・前年度重点項目については、全体的に概ね目標を達成することができたが、学力の定着と向上に課題がある。「あくしゅタイム(話し合い活動)」に継続して取り組み、協働的な学びを推進していきたい。 ・特別支援教育に関する専門性が向上したと回答した職員は90%以上であったが、支援を必要している児童生徒の割合は高いため、さらなる支援体制の構築と支援の充実を目指す。 ・道徳を中心として「望ましい生活習慣の形成」に取り組んだが、明るく気持ちのよい挨拶ができているとは言えなかった。今年度は、多久学や論語教育を推進していく中で、明るく元気で気持ちのよい挨拶ができるようになってほしい。 ・学校・家庭・地域の連携をさらに推進し、児童生徒を中核においた教育活動に取り組んでいく。 ・ライフワークバランスを意識した働き方ができたと回答した職員は、目標の90%を達成できなかったが、時間外在校時間は減少してきた。昨年度の取り組みを見直しながら継続徹底していく。
2 学校教育目標	**「ふるさとに学び、志をもち、共に高め合う西渓っ子」の育成**
3 本年度の重点目標	**①「あくしゅタイム」(話し合い活動)の推進とICTを活用した授業実践。** **②特別支援コーディネーターを中心とした支援体制の構築と個別の支援計画を活用した支援の充実。** **③総合的学習の時間及び道徳科を中心とした多久学・論語教育の推進。** **④学校・家庭・地域と連携した各種活動の推進。**

4 重点取組内容・成果指標 ／ 中間評価 ／ 5 最終評価

（1）共通評価項目

評価項目	取組内容	成果指標（数値目標）	具体的取組	中間評価 進捗度（評価）	中間評価 進捗状況と見通し	最終評価 達成度（評価）	最終評価 実施結果	学校関係者評価 評価	学校関係者評価 意見や提言	主な担当者
●学力の向上	〇主体的・対話的で深い学びを意識した授業実践 〇学習規律の徹底	〇「あくしゅタイム」(ねらいに迫る交流の場)で、考えを広げたり深めたりすることができたと回答した児童生徒90%以上 〇授業の始まりで、立腰、学習用具の準備など学習に向かう心構えができたと回答する児童生徒85%以上	・全教師が明確な意図を持って「あくしゅタイム」を設定し、その目的と評価を児童生徒に明示することで、「あくしゅタイム」の意義を児童生徒が感じ、意欲をもって実践していくようにする。 ・学習部とも連携し、全職員が同じ指導を行うことで学習規律を徹底させる。	B	・「あくしゅタイム」で、考えを広げたり深めたりすることができたと回答した児童生徒は79%であった。引き続き、「あくしゅタイム」が意味のある活動になるように、目的を明らかにして設定し、方法を工夫していく必要がある。 ・授業の始まりで、立腰、学習用具の準備など学習に向かう心構えができたと回答した児童生徒は89%であった。年度初めに学習規律について全職員で共通理解を図ったことで、各学級で周知・徹底ができている。	A	・「あくしゅタイム」で、考えを広げたり深めたりすることができたと回答した児童生徒は84%であった。91%の職員が、「あくしゅタイム」を積極的に実践し、その目的と評価を児童生徒に伝えることができている。 ・授業の始まりで、立腰、学習用具の準備など学習に向かう心構えができたと回答した児童生徒は97%であった。全職員が同じ指導を行うことで、学習規律を徹底させることができた。	A	・授業の始まりが「かつお」の合言葉で、けじめをつけてされていることはとてもよいと思う。 ・「西渓スタイル」という学び方を確立していることが非常に良いと思う。 ・学習への意欲をもたせる工夫や努力をされていると感じた。ただ、学力の底上げが必要だと思う。中間層を上位へ、下位を中間層へ引き上げてほしい。	校内研究主任 学力向上コーディネーター 全職員
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	〇ふれあい道徳参観での感想や学校評価アンケートで「学校は豊かな心の教育に積極的に取り組んでいる」と回答した保護者が95%以上	・道徳教育に全ての教育活動を通して取り組む。特に、道徳科の授業において、「考え議論する道徳」を実践し、児童生徒の道徳性の涵養を目指す。家庭、地域と連携して道徳教育に取り組む。	B	・「考え議論する道徳」の授業改善を行い、地域家庭と連携した道徳教育に取り組んでいると回答した教員は約82%であった。引き続き、あくしゅタイムを意図的に組み込み、「考え議論する道徳」をすすめる必要がある。 ・授業実践交流会では全学年で授業公開を行った。「6・23沖縄慰霊の日」に合わせた平和教育や「人権ポスター及び標語の作成（全学年）」「人権総合学習（4・6・9年）」に取り組み、児童生徒の人権意識の向上に努めた。	A	・地域家庭と連携した道徳教育に取り組んでいると答えた教員は89%と前回より増え、地域との連携を意識して取り入れることができた。また、95%の教員があくしゅタイムを積極的に授業に取り入れることができたと答え、「考え議論する」授業を意図的に行うことができている。 ・計画通りに人権教室を平和教育に関する取組を実施することができた。心の教育に関するアンケートで肯定的な回答をした保護者94%。	A	・論語教育を継続してされているので、心の優しい児童生徒が多いと感じる。「恕」の心をますます浸透させてほしい。 ・9年生が学校のよき手本となっている。	道徳推進教員 人権同和教育担当
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	〇いじめ防止等について、組織的対応ができていると回答した教員が100%	・月に1回生活調査（あくしゅ）アンケートを行い、いじめの早期発見に取り組む。 ・生徒指導協議会において、全職員で共通理解を図り、開発的・予防的な生徒指導を行う。	B	・「いじめ防止等について、組織的対応ができている」と回答した教員は95%であった。100%に向けて取り組んでいきたい。具体的取組である月1回のあくしゅアンケート等を通して、いじめの早期発見、早期対応を実施しており、今後も継続して取り組みたい。	A	・「いじめ防止等について、組織的対応ができている」と回答した教員は100%であった。具体的取組である月1回のあくしゅアンケート等を通して、いじめの早期発見、早期対応を実施しており、いじめの早期解決につながっていた。そのため、いじめの認知件数は多いが、重大事案につながることはなかった。	A	・いじめの定義の変化に対応し、全職員でしっかり取り組んでいる。細かい事案まで、丁寧に対応してもらい、早期発見、早期解決につながっていることに感謝している。 ・大人に成長してからハラスメントの加害者にならないように、今のうちに相手に不快感を与えない言動を身につけるための指導を続けてほしい。 ・思いやりのある言動とは、相手の安心や成長を願っての言動であることを、繰り返し指導していってほしい。	生徒指導担当
	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒85%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・体育大会や文化発表会をはじめとする行事や各学年で行う体験活動を通して、児童生徒の自主性、自発性を育んでいく。 ・二分の一成人式や立志式などの節目の行事では、将来への見通しをもたせる機会を設け、夢や目標を明確にさせる。	B	・「よいところ」の項目では、児童生徒の肯定的な回答は約91%であった。称賛や感謝の価値付けを積極的に行っていると回答した教職員が100%であることから、教師の働きかけにより、児童生徒の自己肯定感の向上につながったと考える。 ・「将来の夢や目標」の項目は約77%、昨年度より肯定的な回答をした児童生徒の割合が増加している。指導する際に「夢＝目標(挑戦したいこと)」と捉え方の幅を広げて提示し、目標をスモールステップで設定させ達成感を味わわせることで、児童生徒に自信をつけさせたい。	A	・「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒94%以上。「児童生徒一人ひとりのよい点や可能性を見つけ評価する(褒める)取組を行っている」と自己申告した教師の割合100%。 ・「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒77%以上。「児童生徒の自主性自発性を大切にした指導を行うことができた」と回答した教師の割合90%以上。振り返りの活動を確保し、目的と関連させながら活動によって得た学びを深めさせ、次の活動へ生かす指導を今後も行っていく必要がある。	A	・立志式、10歳の集いなど節目節目の行事を通して、将来の見通しや目標をもたせていることはとてもよい。 ・先生方から褒められている、認められていると感じている児童生徒が90%以上いることから、日頃の先生方のあたたかい指導や支援がわかる。 ・4月当初は自己肯定感が低い子が多かったが、全体的に少しずつ高くなっていることを感じた。	特別活動部
●健康・体つくり	●「望ましい生活習慣の形成」	●元気のよい挨拶ができていると回答した児童生徒80%以上 ●早寝・早起き・朝ごはんの望ましい生活習慣ができていると回答した児童生徒80%以上	・西渓会(児童生徒会)を中心に、相手を意識した主体的挨拶を推進する。 ・学級活動や保健だよりの発行等で児童生徒への啓発活動を行う。	B	・教員の95%が児童生徒が進んで元気に挨拶をするように指導していると回答し、「できている」と回答した児童生徒は71%であった。西渓会を中心に、学年ごとに挨拶運動を行う取り組みを行っているが今後見直していく必要がある。 ・教員の86%が学級活動や保健だよりなどを通して児童生徒の望ましい生活習慣作りに努めている。それに対し、「望ましい生活習慣ができている」と回答した児童生徒は79%であった。	B	・すべての教員が児童生徒が進んで挨拶をするように指導しており、児童生徒の75%が進んで挨拶をしていると答えている。今後も進んで挨拶をするように西渓会と協力して取り組みを行っていく。 ・教員の95%が学級活動や保健だより等を通して児童生徒の望ましい生活習慣作りに努めている。その結果「望ましい生活習慣ができている」と回答した児童生徒は72%であった。今後も継続し啓発活動を行い、必要な児童生徒には個別で指導を行う必要がある。	B	・まずは挨拶をしっかりと行うことができる児童生徒であってほしい。先生方はそのための指導をがんばっているが、親の挨拶ができていないため、子どももそれを見ている。親がもっと挨拶を意識しなければならないと思う。 ・先生と児童生徒が挨拶運動をしていることはとても良いと思う。ただ、立つ場所や挨拶の声の出し方など、相手に不快感を感じさせない方法を工夫してほしい面もあった。	教育相談担当
	〇安全に関する資質・能力の育成	〇児童生徒や教員の交通事故、生活事故の発生件数0(ゼロ)	・集団登校を月1回行い、その実施における登下校の安全確認に取り組む。 ・交通安全教室の実施により、歩行、自転車の扱いなどへの注意喚起を行う。	B	・全体的には交通事故・生活事故0(ゼロ)を達成できていたが、マナーや交通ルールの面では今後とも指導していく必要がある。特にスクールバスの乗り方について指導することがあった。 ・後期課程では自転車点検を実施しているが、自転車の乗り方には不安が残る。交通安全教室や、集会での指導を繰り返し行う必要がある。	B	・全体的には交通事故0(ゼロ)を達成できていたが、マナーや交通ルールの面では今後とも指導していく必要がある。特にバスの乗り方について全体的・個人的に指導することがあった。生活事故はのこぎり等道具の不慣れでのけがが見られた。 ・後期課程では自転車点検を実施しているが、自転車の乗り方には不安が残る。交通安全教室や、集会での指導を繰り返し行う必要がある。	B	・交通指導に立っていると、止まってくれた自動車のドライバーに丁寧に頭を下げていく子、自転車通学中に交通立番をしている人を見かけたら、自転車を止めて挨拶する子がいてとても気持ちがよくなる。 ・今年度も児童生徒の交通事故が起きていないのはすばらしい。ただ、早朝の薄暗い時間の登校や、暗くなってからの下校の様子を見ていると、制服が黒っぽい色のため、事故が起きそうで心配な場面を見かけた。早朝や夕方の事故を防ぐために、靴やカバンに反射材のついたシールを貼るなど手立てを工夫してはどうか。	生徒指導担当
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限45時間以内を守ることができた職員80%以上 ●ライフワークバランスを意識した働き方ができたと回答する教員が90%以上	・ペーパーレス会議の継続、推進。 ・会議の開始時刻、終了時刻の徹底(会議時間60分)。 ・業務に見通しを持つための施錠時刻の設定と徹底。 ・定時退勤日の徹底(水曜日)。 ・電話対応時間の設定(朝:7:30から、夕:部活終了後30分迄)。	B	・職員会議等、会議の多くはペーパーレスで実施し、予定時間内に会議を終了するよう心がけたが、内容によっては予定時間を超えてしまうことがあった。 ・「定時退勤日を守り、時間外勤務時間上限45時間を遵守するよう努めている」と「ライフワークバランスを意識した働き方ができている」と回答した教員は共に75%であった。 ・定時退勤日の遵守や年休取得を進めるために業務体制を工夫してきたが、まだ個人差が大きい。 ・電話対応時間は設定時間を意識して実行することができた。	B	・時間外在校等時間の上限45時間以内を守ることができた職員が84.5%（45時間未満延べ人数／月数・教員数）で、成果指標は達成できた。 ・会議時間の順守に努め、超過した場合は代替の休憩措置をとる対応ができた。 ・定時退勤日の促進に向け、管理職も水曜18:00退勤を実践したことで改善が図られた。 ・特定の教職員の長時間勤務があり、業務の軽減や支援が必要。 ・行事や講演、出張などの内容と意義を常に確認し、精選・統合することが不可欠。 ・応答電話の利用により、業務に集中しやすい環境となった。 ・ライフワークバランスを意識した働き方ができたと回答した職員は81%。職員の意識改革が必要。	B	・学校では、十分に業務改善を進めてこられた。時間外勤務時間も、昨年度と比べ減ってきている。しかし、県や市教委等が根本的な改革をしなければ、これ以上は難しいのではないかと感じる。現在、なされている業務が本当に教職員によってされるべきことなのか、検討されるべきと考える。	管理職 （副校長、教頭）
●特別支援教育の充実	〇教員の資質向上と支援体制の構築	〇特別支援教育に関する専門性が向上したと回答する教員95%以上 〇組織的・機能的な研修会を年間3回以上、ケース会議や支援会議を適宜実施	・校内特別支援教育ミニ研修会を学期に1回ずつ実施する。 ・特別支援教育コーディネーターを中心に必要に応じてケース会議を実施し、校内支援体制の充実を図る。	B	・教員の95%が特別支援教育に関する専門性が向上したと回答した。 ・リレーションファイル作成の研修を通じて、困り感のある児童生徒について、個別の指導計画作成の意義を共有できた。 ・「発達障害児の理解と具体的な支援の研修会」を9月に実施した。	A	・教員の95%以上が特別支援教育に関する専門性が向上したと回答した。 ・必要に応じてケース会議を実施し、特別な支援を要する児童生徒への校内支援体制の在り方を検討することで、支援や配慮について共通理解を図ることができた。教育支援員とも情報共有を行い、支援体制の調整を行い、きめ細やかな支援ができた。	A	・特別支援教育の研修等を計画的に実施されていることがすばらしい。今後も、特別支援教育の重要性を共有化し、さらに充実させてほしい。	特別支援コーディネーター

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

評価項目	重点取組内容	成果指標（数値目標）	具体的取組	中間評価 進捗度（評価）	中間評価 進捗状況と見通し	最終評価 達成度（評価）	最終評価 実施結果	学校関係者評価 評価	学校関係者評価 意見や提言	主な担当者
〇情報モラル教育の充実	〇情報モラルに関する指導の充実	〇情報モラルに対する意識が高まったと回答する児童及び保護者が80%以上 〇情報モラルに関する授業実践を年間2回以上行った職員が100%	・各学期に情報モラルに関する道徳の授業を全クラスで実践する。 ・保護者と3～9年生対象に「情報モラル教室」を行う。 ・学校からの通信等で保護者に継続して啓発をする。	B	・教員の91%が情報モラルに関する授業実践やお便りの配付など、児童生徒や保護者に啓発ができたと回答した。 情報モラルに関する道徳の授業を、発達段階に合わせて実践することができた。タブレット端末の紛失があったため、教員同士で共通理解を徹底し、児童生徒にも再度タブレット端末の利用の仕方や情報の漏洩の危険について確認する必要がある。	B	・教員の95%が情報モラルに関する授業実践やお便りの配付など、児童生徒や保護者に啓発ができたと回答した。 ・情報モラルに関する道徳の授業を、発達段階に合わせて実践することができた。タブレット端末の管理について、改めて教員で意見を出し合い共通理解した。毎朝の健康チェックをタブレットで行うことで、所在確認を徹底し、さらにタブレット活用を促した。	B	・学校では工夫して指導されている。家庭でこそSNSの使用方法を話し合い、ルール作りをするなどすべきだと思う。 ・SNSのトラブルが一般的に増えていることを考えると、保護者を含めた教育が必要と考える。闇バイト問題等、具体的に保護者が危機感をもって学ぶべきである。	教育情報化推進リーダー
〇コミュニティ・スクールの推進	〇学校・家庭・地域と連携した各種活動の推進	〇授業などでお家の人や地域の人と一緒に学ぶ活動が行われていると回答した児童が70%以上 〇家庭・地域と連携した教育活動が行われていると回答した職員が80%以上	・多久学を中心に「恕の心、ふるさと多久を愛する心」を育むための授業や活動を、全クラスで計画的に単元を仕組んで実践する。 ・児童生徒が地域の人とのつながりを実感し、感謝の心を持つことができるように、地域の人や保護者に学習支援ボランティアや外部講師を依頼するなど、連携した活動を推進する。	A	・春と秋の釈菜における「釈菜の舞」「腰鼓」の取り組みや各学年で地域との触れ合いを含めた活動を計画的に実施することができた。 ・各学年担任を中心に地域の外部講師や施設と連携した教育活動を活発に行うことができている。また、学習支援ボランティアの呼びかけを積極的に行い、家庭や地域の人と児童生徒の交流が昨年度より増えた。	A	・授業などで家庭や地域の人と一緒に学ぶ活動が行われていると回答した児童は85%であった。児童生徒が地域の人とのつながりを実感することができている。 ・家庭・地域と連携した教育活動を行うことができたと回答した職員は100%であった。 ・地域のニーズもあり、多久学を通して児童生徒が地域の歴史や文化を知る機会が増えた。	A	・CSフェスタの取り組みなど、コミュニティスクールとして理想的な活動ができている。今後も地域と学校が協力して、双方を盛り上げてほしい。	義務教育学校教育コーディネーター 学校運営協議会担当 （副校長）

●・・・県共通　〇・・・学校独自　◎・・・志を高める教育

5 総合評価・ 次年度への展望	・学校教育目標達成のために掲げた重点取組（①②③④）については、全体的に目標を達成することができた。次年度は 、校内研究でもある学力向上に特に力を入れていきたい。 ・今年度は、コミュニティスクールとして学校・家庭・地域の連携を深化した。来年度は、児童生徒を主体とした教育活動(学習指導、生活指導、キャリア教育等)を更に推進していきたい。 ・B評価の項目、特に「児童生徒の望ましい生活習慣の形成」と「教職員の働き方改革の推進」については、その要因を分析し、全体で共通理解を図ることで、今年度よりも達成率が少しでも上がるよう改善向上に取り組んでいきたい。 ・目標達成のためには、教職員だけでなく保護者や学校関係者にも自分事として課題をとらえてもらいたい。そのためにも、分かりやすい表現で取組内容や指標を保護者や学校関係者に示し、客観的評価ができるような具体的評価指標を立てる必要がある。